遊天台山日記［浙江台州府］

●万暦四十一（一六一三）年三月晦（三十日）～四月八日、九日間　徐霞客二十八歳

凡例

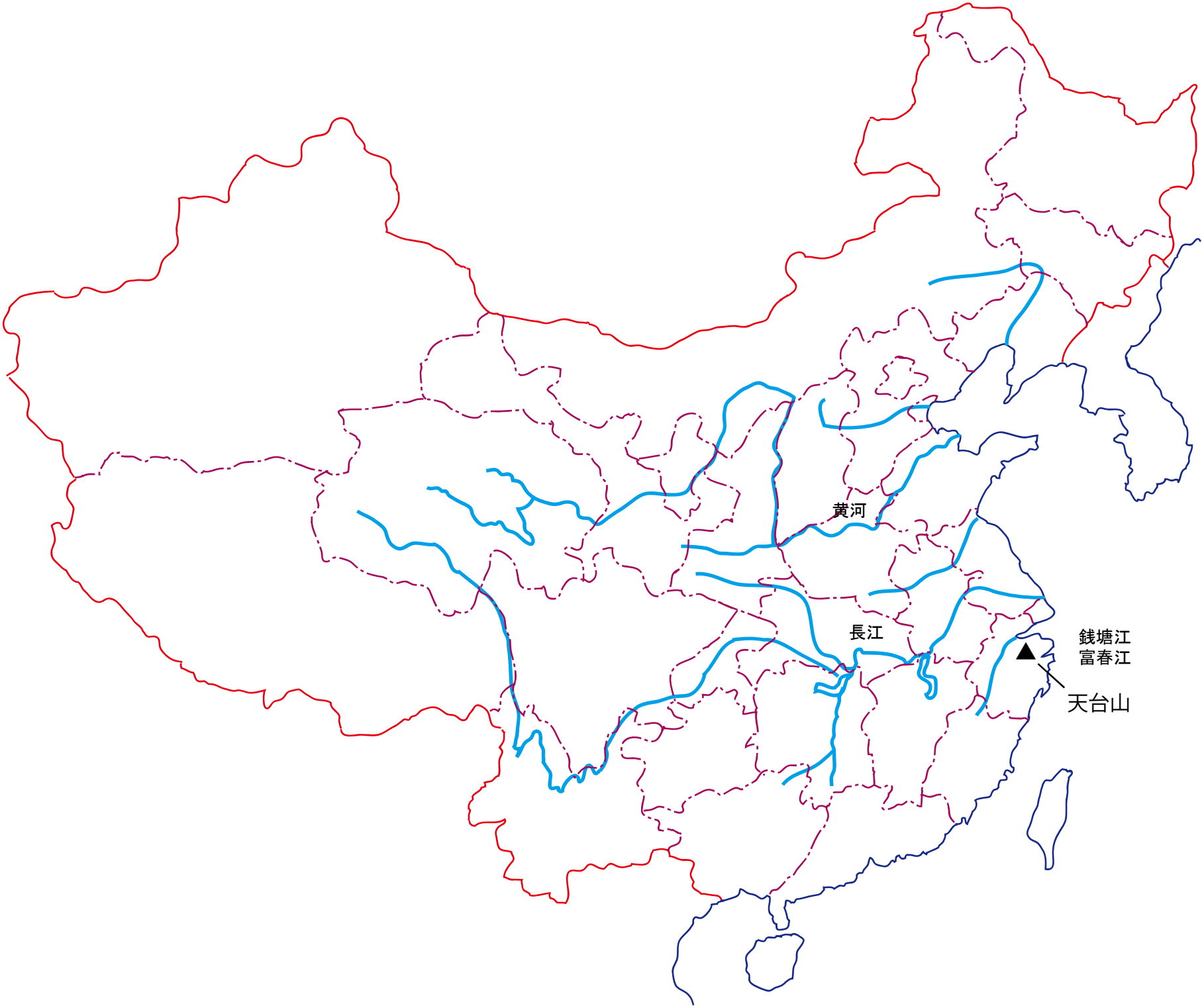
・■**本文の**部では、一定の日ごとに区切り、本文を掲げ、●**校勘**を施す。
・■**訳注の部**では、一定の日ごとに区切り、さらに内容上のまとまりでも区切り、●**訓訳**、●**語注**、●**口語訳**の順で記す。
・本文は、褚紹唐・呉王寿整理の上海古籍出版社本（一九八〇年（「上海新整理本」と略）とする。
・徐霞客の自注は［　］で示す。
・口語訳においては、本文中では［自注1］などと記し、文末に［自注1］の内容を別記した。

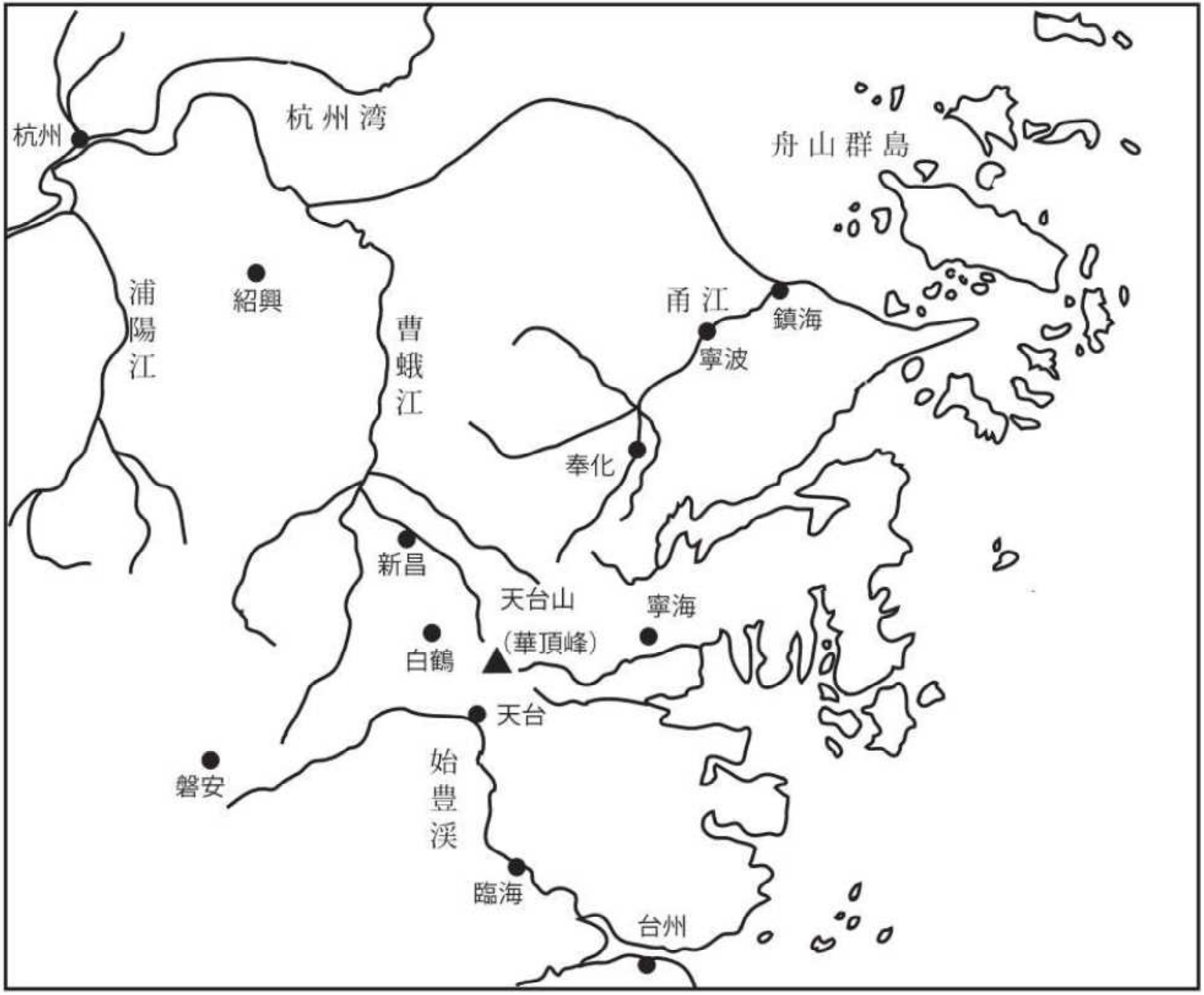
参照文献等（「　」は略称）

◇訳注
・徐兆奎注釈『徐霞客名山遊記選注』中国旅遊出版社、一八五二年（「徐名山注」）
・朱恵栄校注『徐霞客遊記校注』雲南人民出版社、一九八五年（「朱校注」）
・曹文趣・応守岩・崔富章選注『両浙遊記選』浙江古籍出版社、一九八七年（「両浙選」）
・朱恵栄等訳注『徐霞客遊記全訳』貴州人民出版社、一九九七年（「朱恵栄」）
・許尚枢・徐永恩選注『天台山遊記選注』西安地図出版社、二〇〇四年（「許選注」）
・朱復融訳注『徐霞客遊記』（中国古典名著訳注選書）広州出版社、二〇〇八年（「朱復融訳」、「初三日」以降を収録）
・湯化・郭丹注評『徐霞客遊記』（歴代名著精選集）鳳凰出版社、二〇〇九年（「湯注評」）

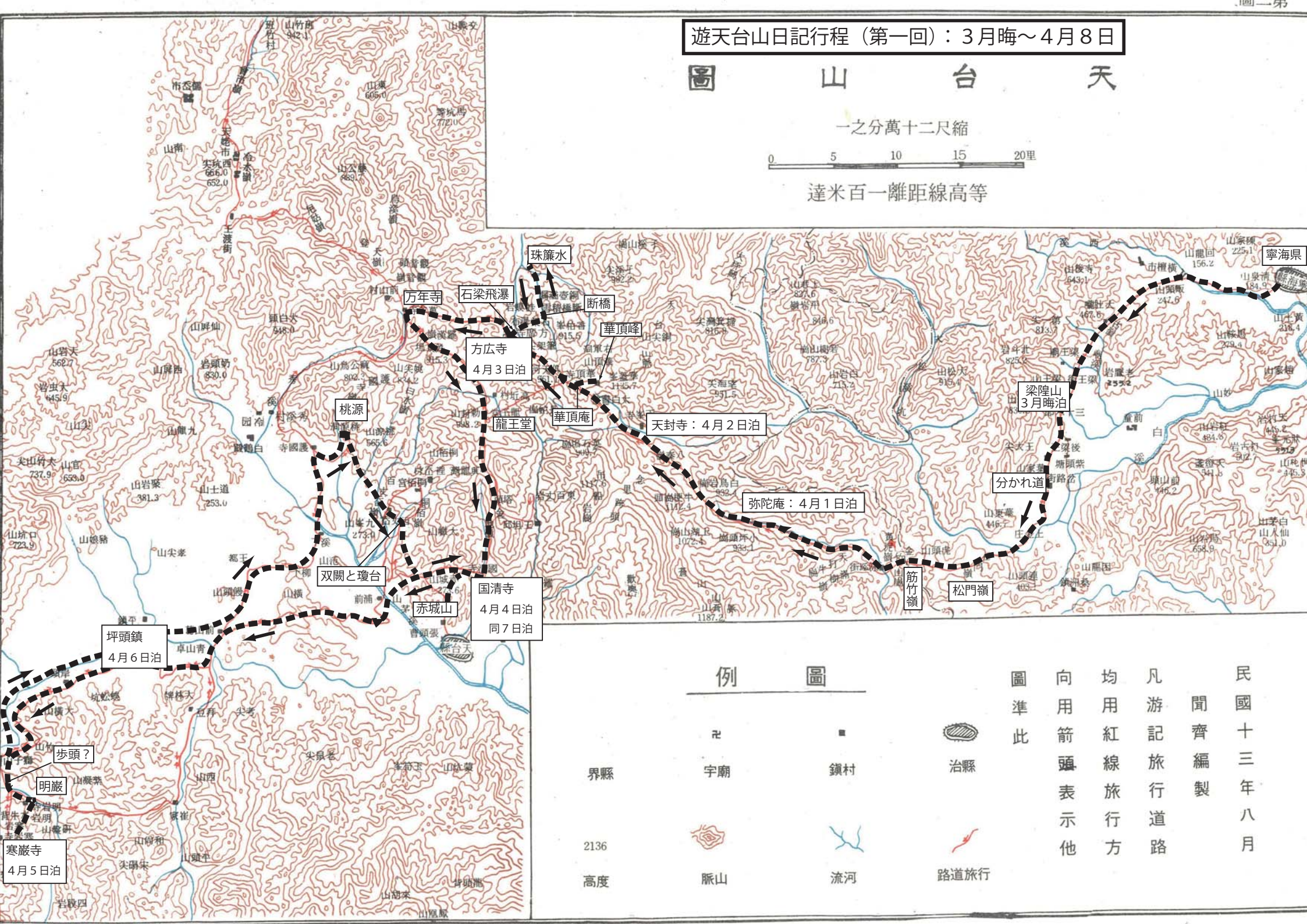
◇参考文献
・釈伝灯撰『天台山方外志』万暦二十九年（一六〇一）序（「方外志」）
・浙江省地名委員会編『浙江地名簡志』浙江人民出版社、一九八八年（「地名簡志」）
・『中華人民共和国地名詞典　浙江省』一九八八年（「地名浙江」）

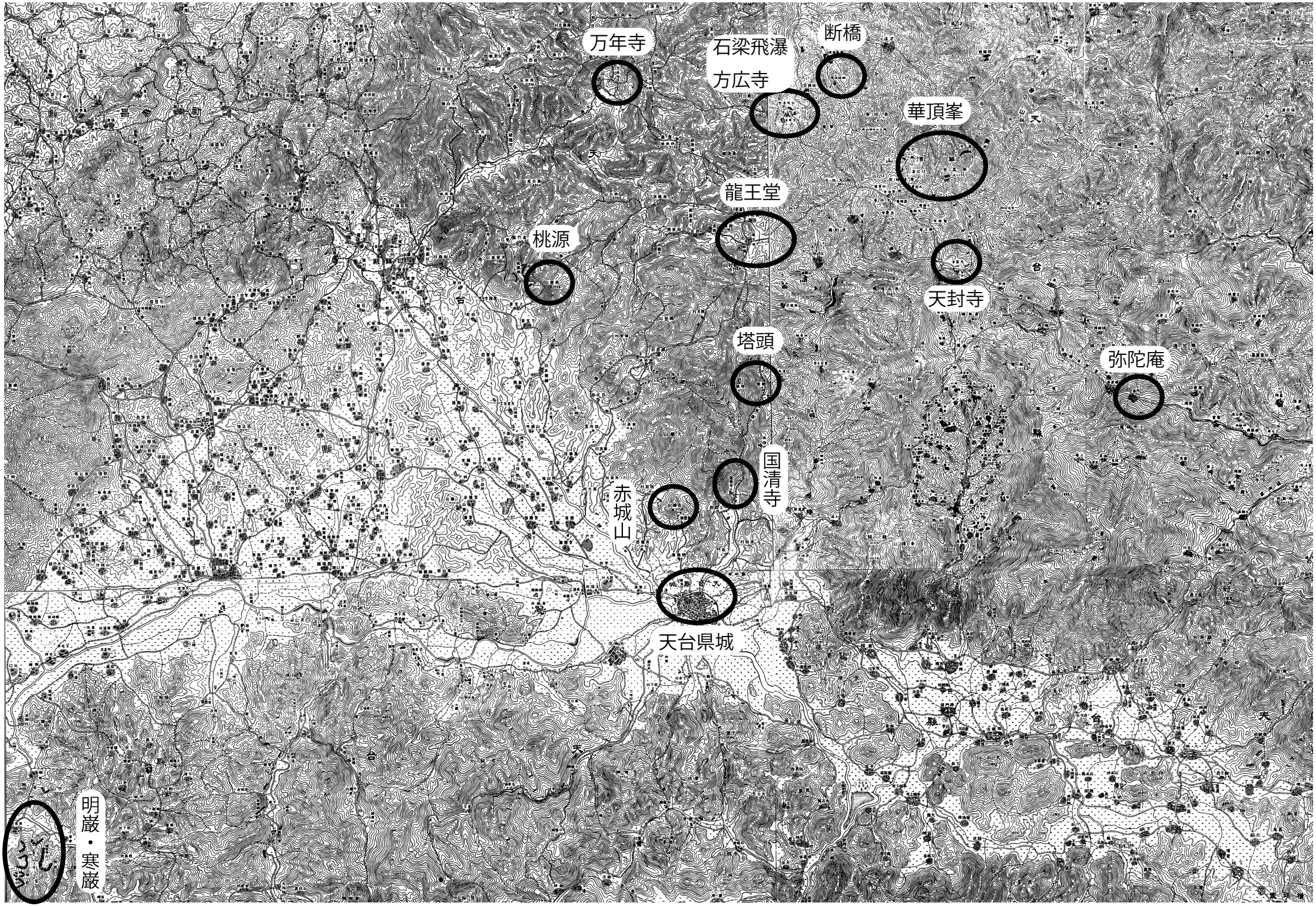
◇参考地図
○徐霞客地図
・丁文江撰『徐霞客游記二十巻』付図、上海商務印書館、一九二八年（「丁本付図」）
・褚紹唐主編『徐霞客旅行路線考察図集』中国地図出版社、一九九一年（「路線図」）
○清朝地図
・宗源瀚等撰『浙江全省輿圖水陸道里記』輿圖総局、一八九四年（「全省輿図」）
○外邦図（陸軍参謀本部陸地測量部製作）
・「寧海縣城」南支那五万分一圖台州四十五圖（「寧海」図）
・「華頂山」南支那五万分一圖台州（「華頂」図）
○現代地図
・『台州交通旅遊図―天台』山東地図出版社、二〇〇二年（「現代図」）


黄河
長江
錢塘江
富春江
天台山


杭州湾
杭州
舟山群島
浦陽江
紹興
曹蛾江
甬江
鎮海
寧波
奉化
新昌
天台山
(華頂峰)
寧海
白鶴
天台
始豊渓
磐安
臨海
台州

遊天台山日記行程（第一回）：３月晦～４月８日




万年寺
石梁飛瀑
断橋
方広寺
華頂峯
龍王堂
桃源
天封寺
塔頭
弥陀庵
国清寺
赤城山
天台県城
明巌・寒巌

●訳注稿

【三月三十日から四月一日】

■本文の部

癸丑之三月晦　自寧海出西門。雲散日朗、人意山光、倶有喜態。三十里、至梁隍山。聞、此地於菟夾道、月傷數十人、遂止宿。

四月初一日　早雨。行十五里、路有岐。馬首西向台山、天色漸霽。又十里、抵松門嶺。山峻路滑、舍騎歩行。自奉化來、雖越嶺數重、皆循山麓。至此迂迴臨陟。倶在山脊。而雨後新霽、泉聲山色、往復創變。翠叢中山鵑映發、令人攀歴忘苦。又十五里、飯於筋竹庵。山頂隨處種麥。從筋竹嶺南行、則向國清大路。適有國清僧雲峯同飯。言「此抵石梁、山險路長。行李不便、不若以輕装往、而重擔向國清相待。」余然之、令擔夫隨雲峯往國清、余與蓮舟上人就石梁道。行五里、過筋竹嶺。嶺旁多短松。老幹屈曲、根葉蒼秀。倶吾闔門盆中物也。又三十餘里、抵彌陀庵。上下高嶺、深山荒寂［恐藏虎、故草木倶焚去］。泉轟風動、路絶旅人。庵在萬山坳中。路荒且長。適當其半、可飯可宿。

■訳注の部

●訓訳

癸丑の三月晦　寧海より西門を出づ。雲散じ日朗らかにして、人意山光、倶に喜態有り。三十里にして、梁隍山に至る。聞く、此の地　於菟道を夾み、月に數十人を傷つく、と。遂に止宿す。

四月初一日　早(つと)に雨ふる。行くこと五十里にして、路に岐有り。馬首　西に台山に向かふ。天色漸く霽(は)る。

又　十里にして、松門嶺に抵(いた)る。山は峻にして路は滑なり。騎を舍(す)てて歩行す。奉化より來、嶺を越ゆること數重なりと雖も、皆　山麓に循ふ。此に至りて迂回して臨み陟る。倶に山の脊に在り。而して雨ふりし後に新たに霽れ、泉聲山色、往復變を創る。翠叢の中に山鵑映發し、人をして攀歴するに苦を忘れしむ。

又　十五里にして、筋竹菴に飯す。山頂は隨處に麥を種う。筋竹嶺より南に行けば、則ち國清に向かふ大路なり。適たま國清の僧雲峯なるもの有りて飯を同にす。言へらく「此より石梁に抵るは、山は嶮しく道は長し。行李便ならず、輕装を以て往き、重擔は國清に向かはしめて相待つにしかず。」と。余、之を然りとし、擔夫をして雲峯に隨ひて國清に往かしめ、余は蓮舟上人と石梁道に就く。

行くこと五里にして、筋竹嶺を過ぐ。嶺の傍らには短松多し。老幹屈曲し、根葉蒼秀たり。吾が闔門の盆中の物に倶(ひと)し。

又　三十里にして、彌陀庵に抵る。上下高嶺にして、深山荒寂たり［虎を藏せんことを恐る。故に草木倶に焚去す。］泉轟き風動き、路に旅人絶す。庵は萬山の坳中に在り。路は荒にして且つ長し。適(まさ)に其の半に當る。飯すべく宿すべし。

●語注

○癸丑　万暦四十一年、西暦一六一三年にあたる。

○寧海　浙江省寧海県。明代は台州府に属した。

○梁隍山　梁皇山とも。寧海県の西南にある。「地名浙江」によれば、県城の東七㌔にあり、主峰は海抜七百六十八㍍。同書は、明『崇禎寧海県志』の、南朝の梁末に陳霸先に攻められた昭明太子がこの地に逃げ込んだことがその名の由来だとする説を載せる（「許選注」も同じ）。「寧海」図、「丁本付図」には梁王山があり、その東麓に梁王廟があり、街道筋には梁王街の名が記されている。

○於菟　虎の異名。

○岐　分かれ道。「遊天台山日記　後」（以後「後記」）の岔路口（街）だろう。

○松門嶺　寧海県の西端にあるとうげ道。「華頂」図、「丁本付図」に松門嶺と記す。

○奉化　県。浙江省寧波に属した。地形を表す図によれば、この辺りから山がちになる。

○山鵑　杜鵑花の別称。映山紅ともいう。春に赤い花をつける観賞植物。白居易「雨中赴劉十九二林之期及到寺劉已先去因以四韻寄之」に、「最惜杜鵑花爛漫、春風吹盡不同攀」とある。

○映發　輝き映えること。劉義慶『世説新語』言語篇に「從山陰道上行，山川自相映發，使人應接不暇」とある。

○筋竹庵　筋竹嶺にあった庵なのだろう。「方外志」巻二形勝考（東門第二支）に「修竹干竿、蘭若數楹。長者福聚、納子化城。則有筋竹嶺庵之勝」とあり、当時筋竹嶺に庵があったことが分かる。

○筋竹嶺　寧海県と天台県との境をなすとうげ道。金竹嶺・金嶺ともいう。筋竹（越王竹）を産したのが名の由来という（徐名山注）。「方外志」巻三（嶺）に「筋竹嶺。在縣東四十六里。與寧海分界」とある。「全省輿図」には筋竹嶺、「華頂」図には金竹嶺、「丁本付図」には金竹山崗と記す。

○南行云々　「華頂」図には金竹嶺を西に下ってすぐに永渓街という集落を記す。そこから西南にくだると大渓に出て、天台県城を経由して国清寺に至る道となる。永渓街から西へ進めば天封寺を経由して華頂峯に至る道となる。「全省輿図」「丁本付図」「現代図」にも永渓街の名を記す。

○石梁　いわゆる「石梁飛瀑」。天台山中にある景勝のひとつ。

○蓮舟上人　徐霞客と同郷の人で、この旅行で同行していた。

○石梁道　石梁飛瀑へと通じる山道。「方外志」巻二形勝考（西門第二左支）に「紅塵白雲、僊凡道分。石梁捷徑、瑞氣氤氳。則有石梁道之勝」とある。

○閶門　蘇州都城の門のひとつ。蘇州そのものを表していようが、それでは意味が通じにくい。ここでは天台山中から見た、下界を代表させているのであろう。

○彌陀庵　仏者の庵があったのだろう。「方外志」巻二形勝考（東門第二支）に「雲生足底、人行天上。誰挈我衣、空中五兩。則有彌陀庵仰天湖道中之勝」とあり、当時庵があったことが分かる。なお天台山を再訪した「後記」では湮滅していたという。後の地図では確認できない。

○坳　山の隈の平地。

●口語訳

癸丑の年

［浙江台州府寧海県域］

《1》寧海から天台山へ

［三月三十日］

寧海県を西門から出発する。雲もなく晴れ渡り太陽が輝き、人の心情も山の姿も、喜んでいるかの如くである。三十里進むと梁隍山に至った。聞くところによれば、この地では虎が跋扈しており、月ごとに数十人に被害を与えているという。そこでここに宿泊することとする。

◆梁隍山に泊。

［四月一日］

朝は雨。十五里進むと分かれ道がある。馬首を西に向け天台山へ向かう。空が次第に晴れてくる。

また十里進むと、松門嶺に至る。山道は険峻で路面は滑りやすい。そこで馬から下りて歩くことにする。奉化よりこのかた、幾重もの山道を越えてきたが、どれも山麓をめぐるものであった。それがこの地に至って、迂回したり、谷川に臨んだり高い所に登ったりすることになってきた。すべて山の尾根である。雨が上がったばかりで晴れ渡り、美しい山の景色の中に渓流の音が聞こえ、繰り返し新しい景勝が出現する。緑の草むらの中に杜鵑花が赤く映えており、山を登る苦しさを忘れさせてくれる光景である。

また十五里進み、筋竹庵で昼食とする。山頂ではあちこちで麦を植えている。筋竹嶺より南に行けば、国清寺へ向かう大路である。たまたま国清寺の僧侶で雲峯というものと食事をともにすることになる。彼が言うには「ここから石梁に至るには、山道は険しく、且つ長い。荷物を携帯していくのは大変であり、軽装で行き、重い荷物は（人に運ばせて）国清寺で待たせているのがよい」と。私はその意見に同意し、担夫に雲峯とともに国清寺に行かせ、自分は蓮舟上人とともに石梁への道をたどることとする。

［浙江台州府天台県域］

五里進むと筋竹嶺を過ぎる。嶺の旁らには背の低い松の木が多い。年を経た幹は屈曲し、根の辺りは葉が青々と茂っている。まるで下界の我が家にある盆栽のようだ。

また三十里進むと弥陀庵に至る。上下ともに高峻な山嶺であり、奥深い山で荒涼としている［自注1］。渓流の音が鳴り響き、強風が大地を揺るがしており、山道を行く人は他にはいない。弥陀庵は重なる山々の中の平地にある。これからの道は厳しくかつ長い。またちょうど道程の半ばにあたる。ここで食事にして宿をとるのがよい。

◆弥陀庵に泊。

［自注1］虎が隠れるのを恐れて、草木を焼き払っているのであろう。

【四月二日から三日】

■本文の部

初二日　飯後、雨始止。遂越潦攀嶺。溪石漸幽。二十里、暮抵天封寺。臥念、晨上峯頂、以朗霽爲縁。蓋連日晩霽、並無曉晴。及五更夢中、聞明星滿天、喜不成寐。

初三日　晨起、果日光燁燁。決策向頂、上數里、至華頂庵。又三里、將近頂、爲太白堂。俱無可觀。聞、堂左下有黄經洞。乃從小徑。二里、俯見一突石。頗覺秀蔚。至則一發僧、結庵於前、恐風自洞來、以石甃塞其門。大爲歎惋。復上、至太白、循路登絶頂。荒草靡靡。山高風冽、草上結霜高寸許。而四山廻映、琪花玉樹、玲瓏彌望。嶺角山花盛開、頂上反不吐色。蓋爲高寒所勒耳。

仍下華頂庵。過池邊小橋、越三嶺。溪廻山合、木石森麗。一轉一奇、殊慊所望。二十里、過上方廣、至石梁。禮佛曇花亭、不暇細觀飛瀑。下至下方廣、仰視石梁飛瀑、忽在天際。聞、斷橋珠簾尤勝。僧言、「飯後行、猶及往返。」遂由仙筏橋向山後、越一嶺。沿澗八九里、水瀑從石門瀉下、旋轉三曲。上層爲斷橋。兩石斜合。水碎迸石間、匯轉入潭。中層兩石對峙如門。水爲門束、勢甚怒。下層潭口頗闊、瀉處如閾、水從坳中斜下。三級俱高數丈、各極神奇。但循級而下、宛轉處爲曲所遮、不能一望盡收。又里許、爲珠簾水。水傾下處甚平闊、其勢散緩、滔滔汩汩。余赤足跳草莽中、揉木縁崖。蓮舟不能從。暝色四下、始返。停足仙筏橋、觀石梁臥虹、飛瀑噴雪。幾不欲臥。

■訳注の部

●訓訳

初二日　飯の後、雨始めて止む。遂に潦を越え嶺を攀ず。溪と石と漸く幽なり。二十里にして、暮に天封寺に抵る。臥して念ふ、晨に峯頂に上らんとするに、朗霽を以て縁となす。蓋し連日晩に霽れ、並びに曉より晴るる無し。五更夢中に及び、明星天に滿つと聞く。喜びて寐を成さず。

初三日　晨に起く、果たして日光燁燁たり。策を決して頂に向かふ。上ること數里にして、華頂庵に至る。又　三里、將に頂に近からんとするに、太白堂たり。俱に觀るべきなし。聞く、「堂の左下に黄經洞有り。」と。乃ち小徑による。二里にして、俯して一突石を見る。頗る秀蔚たるを覺ゆ。至れば則ち一髪僧の、庵を前に結び、風の洞より來るを恐れ、石甃を以て其の門を塞ぐ。大いに歎惋をなす。

復た上り、太白に至り、路に循ひて絶頂に登る。荒草靡靡たり。山は高く風は冽にして、草の上に霜を結ぶこと高さ寸許(ばか)りなり。しかして四山廻映すれば、琪花玉樹、玲瓏として彌望たり。嶺角には山花　盛んに開き、頂上には反って色を吐かず。蓋し高寒の勒するところとなるのみ。

仍りて華頂庵に下る。池邊の小橋を過ぎ、三嶺を越ゆ。溪廻り山合し、木石森麗たり。一轉に一奇あり、殊に望むところを慊す。

二十里にして、上方廣を過ぎ、石梁に至る。曇花亭に禮佛す。細(つぶさ)に飛瀑を觀るに暇あらず、下りて下方廣に至り、仰いで石梁飛瀑を視るに、忽ち天際に在り。

聞く、「斷橋・珠簾　尤も勝なり。」と。僧言ふ、「飯後に行けば、猶ほ往返に及ぶ。」

と。遂に仙筏橋より山の後ろに向かひ、一嶺を越ゆ。

澗に沿ふこと八九里にして、水瀑　石門より瀉下し、旋転すること三曲なり。上層は斷橋たり。兩石斜めに合す。水は石間に砕け迸り、匯転して潭に入る。中層は兩石の對峙すること門の如し。水は門の爲に束ねられ、勢ひ甚だ怒なり。下層は潭口頗る闊し。瀉せる處は閾の如く、水は坳中より斜めに下る。三級倶に高さ數丈、各々神奇を極む。但だ、級に循ひて下り、宛轉たるところは曲の遮るところとなれば、一望にして盡く収む能はず。

又　里許りにして、珠簾水たり。水の傾き下るところは甚だ平闊にして、其の勢ひ散緩として、滔滔汨汨たり。余　赤足にて草莽の中を跳ね、木に揉し崖に縁す。蓮舟は從ふ能はず。瞑色四下にして、始めて返る。

足を仙筏橋に停め、石梁の臥虹、飛瀑の雪を噴くを觀る。幾んど臥するを欲せず。

●語注

○潦　雨水のたまり水。

○天封寺　華頂峰の南にある智者大師が開いた寺院。今その名を冠した小村がある。「地名浙江」には「天封。天台県華頂郷人民政府の所在地で、人口一四九人」とある。「方外志」巻四（寺）に「在縣北五十里。陳大建七年、智者大師建。（略）隋開皇五年賜號靈墟道場、漢乾佑中改智者院、宋大中祥府元年改壽昌寺、治平三年改今」とあり、同巻二形勝考（東門第一支）に「水窮山盡、有地靈墟。盤石可坐、精廬可居。則有天封寺之勝」とある。「全省輿図」には天封寺、「華頂」図、「丁本付図」には天峯寺、「現代図」には天封と記す。

○峯頂　華頂峯の頂上。

○五更　おおむね午前四時前後。

○燁燁　光り輝く様。

○頂　華頂峯。天台山の最高峰。「方外志」巻三（峯）に「華頂峯。在縣東北六十里。天台第八重、最高處」とあり、同巻二形勝考（西門第二支）に「見出五雲、天空海闊。星辰四垂、斗柄可幹。則有華頂峯之勝」とある。

○華頂庵　未詳。徐名山注は、現在の華頂寺が元あったところに立てられていた小庵だろうという。今華頂寺があるが、かつては善興寺とも称された。「方外志」巻四（寺）に「善興寺、在縣東北六十里。舊名華頂圓覺道場。晋天福元年僧徳韶建。（略）宋治平三年改今額」とあり、同巻二形勝考（西門第二支）に「萬八峯頭、寺鄰帝座。天籟梵音、六時參和。則有華頂寺之勝」とある。「全省輿図」「華頂」図、「丁本付図」「現代図」いずれも華頂寺を記す。

○太白堂　李白が読書をしたといわれ、後人が堂を立てたらしい。「全省輿図」は太白堂を、「華頂」図、「丁本付図」は太白書堂を記す。

○黄經洞　王羲之が白雲先生のために「黄庭経」を書写し、それを蔵していたと伝える（徐名山注）。「全省輿図」では黄金洞を記す。

○絶頂　華頂峰。天台山の最高峰。

○靡靡　草が倒れ枯れる様。

○琪花玉樹　宝玉のように美しい花や樹木。孫綽「遊天台山賦」に「建木滅景於千尋、琪樹璀璨而垂珠」とあるなど、天台山を形容する際の常套語。

○嶺角　不詳。嶺の角の辺りか。「朱恵栄」は「山脚下」と訳す。今それに従う。
○上方廣・下方廣　石梁飛瀑の周囲には方広寺という寺院があったが、上流から上方広寺・中方広寺・下方広寺の三つがあった。現在は上方広寺は焼失して存在しない。「方外志」には方広寺としては見えず、石橋寺として、巻四（寺）に「石橋寺。在縣北五十里。舊傳五百應眞之境。又有方廣寺隱其中。宋建中靖國元年建。」とあり、同巻二形勝考（北門第二支）に「方廣覿面、伊誰能見。八萬度門、聊通一線。則有石梁橋之勝」とある。
○曇花亭　「方外志」巻十三（古蹟考）に「曇花亭、賈丞相似道建。萬曆甲辰尼性慧、募錢塘葛居士重建」とあるが、不詳。「徐名山注」は、中方広寺あたりにあった施設ではないかという。
○斷橋　石梁より上流にあった自然の橋。「方外志」巻二に「在縣北七十里。」とあり、同巻二に「瀑瀉懸崖、石潭淙淙。奇哉誰設、玄龍之功。則有斷橋之勝」とある。
○珠簾　断橋より更に上流にあった滝。
○閾　門、門の敷居。

●口語訳

［四月二日］

《1》天台山へ（続き）

朝食を終えると、雨がやむ。そこで道を蔽う水たまりを越え、山嶺をよじ登る。渓流と岩石とが次第に薄暗くなっていく。

二十里進み、夕暮れに天封寺に至る。寝床で、明朝の山頂への登攀のことを思いやり、縁があって、晴れの天気にならないかと考える。というのも連日夜になってようやく晴れており、朝から晴れることはついぞなかったからだ。午前四時頃、夢うつつの中で、満天に星が出ているとの話し声を聞く。うれしくなって眠れなくなる。

◆天封寺に泊。

［四月三日］

《2》天台山華頂峯

早朝に起きる。果たして太陽が燦々と輝いている。そこで華頂峰の頂に登ることに決める。

数里登ると華頂庵に至る。更に三里行くと、山頂近くに太白堂がある。どちらも鑑賞に足るものは何もない。しかし次の話を聞く、「太白堂の左の下に黄経洞という洞窟がある」と。そこで小道を下ってみる。

二里行くと、下にひとつの大きな岩が突出しているのが見える。とても美しいと感じた。ところがそこへ至ると、一人の有髪の僧侶が洞窟の前に庵を結んでおり、洞窟から風が吹いてくるのを避けるために、石ころで洞窟の門を塞いでいる。誠に残念に思った。

再び登ることにし、太白堂を経て、山道に順って華頂峰の山頂に登る。山頂は荒れた草地で風に吹かれて草がなびいている。山の標高が高く風は寒冷で、草の上には霜が一寸ばかりもおりている。周囲を見下ろすと山々が四周に展開しており、宝玉のように美しい花々や木々が、細やかに目の限りに広がっている。山麓では花が盛んに咲いているのに、山頂では花が開いていない。山が高く寒冷なためであろう。

元の道をたどって華頂庵に下る。池の畔の小さな橋を過ぎて、さらに嶺を三つ越える。谷川がめぐり山々が重なり、木々が生い茂り岩石が美しく輝いている。一箇所をめぐるたびに新しい奇景が展開し、まったく望むところを満足させる。

《3》方広寺

二十里行き、上方広寺を経由して石梁飛瀑に至る。曇花亭で仏を礼拝する。子細に飛瀑を鑑賞する暇も無く、下って下方広寺に至り、そこから石梁飛瀑を仰ぎ見る。たちまち天の果てにいるかのようである。

「断橋と珠簾が最も優れた景勝だ。」と聞く。僧侶が「昼食後でも往復できる。」と言う。そこで仙筏橋から山の後に向かい、嶺を一つ越える。

《4》断橋

渓流に沿って八九里行くと、滝が石の門のようなところから流れ落ち、ぐるぐるとめぐって三段をなしている。一番上の段が断橋である。二つの石が斜めにもたれかかっている。滝の水がその石の間に砕け散ってほとばしり、またひとつに合わさって淵に入る。真ん中の段は二つの石が門のように対峙している。滝の水は門のために束ねられ、勢いが甚だ激しい。最下段は淵の口がとても広い。水が注いでいるところは門の敷居のようで、水が窪みから斜めに下っている。三段の滝はいずれも高さが数丈あり、それぞれが神奇を尽くしている。しかし流れは段々に下っており、湾曲したところは滝に遮られており、全部を一度に目に収めることはできない。

《5》珠簾水

また一里ばかりで珠簾水がある。水が流れて下るところは平らで広々としており、水勢はゆったりとしていて、蕩々と水音を立てて流れている。私は足をむき出しにして草むらを跳ね、木につかまって崖を登った。しかし蓮舟君はついてこれなかった。夜のとばりがあたりに立ちこめてきて、ようやく還る。

仙筏橋に足を留め、石梁が虹のように掛かり、飛瀑が雪のような飛沫を吹き上げているのを眺める。まったく睡るのが惜しいくらいだ。

◆方広寺に泊。

【四月四日】

■本文の部

初四日　天山一碧如黛。不暇晨餐、即循仙筏、上曇花亭。石梁即在亭外。梁闊尺餘、長三丈、架兩山坳間。兩飛瀑從亭左來、至橋乃合以下墜。雷轟河隤。百丈不止。余從梁上行、下瞰深潭、毛骨俱悚。梁盡、即爲大石所隔、不能達前山。乃還。過曇花、入上方廣寺。循寺前溪、復至隔山大石上。坐觀石梁。爲下寺僧促飯、乃去。飯後、十五里、抵萬年寺。登藏經閣。閣兩重、有南北經兩藏。寺前後多古杉、悉三人圍。鶴巢於上、傳聲嘹嚦。亦山中一清響也。是日、余欲向桐柏宮覓瓊台・雙闕、路多迷津、遂謀向國清。國清去萬年四十里。中過龍王堂。毎下一嶺、余謂已在平地、及下數重、勢猶未止、始悟華頂之高、去天非遠。日暮、入國清、與雲峯相見。如遇故知、與商探奇次第。雲峰言、「名勝無如兩巖、雖遠、

可以騎行。先兩巖而後歩至桃源、抵桐柏、則翠城・赤城、可一覧收矣。」

■訳注の部

●訓訳

初四日　天と山と一に碧なること黛の如し。晨餐に暇あらず、即ち仙筏に循ひて、曇花亭に上る。石梁は即ち亭の外に在り。梁は闊さ尺餘、長さ三丈、兩山の坳間に架かる。兩飛瀑　亭の左より來たり、橋に至りて乃ち合流して下り墜つ。雷轟河隤たり。百丈に止まらず。

余　梁上より行き、下　深潭を瞰おろすに、毛骨倶に慄たり。梁盡くれば、即ち大石の隔つるところとなり、前山に達するあたわず。乃ち還る。

曇花を過ぎ、上方廣寺に入る。寺の前の溪に循へば、復た山を隔つる大石の上に至る。坐して石梁を觀る。下寺の僧の飯を促すがために、乃ち去る。

飯後、十五里にして、萬年寺に抵る。藏經閣に登る。閣は兩重、南北經兩藏有り。寺の前後に古杉多く、悉く三人囲なり。鶴の上に巣くい、聲を傳ふること嘹嚦たり。亦た山中の一清響なり。

是の日、余　桐柏宮に向かひ、瓊臺・雙闕を覓(たず)ねんと欲するも、路多く津に迷ひ、遂に謀りて國清に向かふ。國清は萬年を去ること四十里なり。中ごろ龍王堂を過ぐ。一嶺を下る毎に、余　已に平地にあるかと謂ふも、下に及ぶこと數重あり、勢ひ猶ほ未だ止まず。始めて悟る、華頂の高きこと、天を去ること遠きにあらざると。

日暮れ、國清に入る。雲峯と相い見ゆ。故知に遇ふが如し。與に探奇の次第を商す。雲峯言ふ「名勝は兩巖に如くはなし。遠しとへえども、騎を以て行くべし。兩巖を先にして、後に歩きて桃源に至る。桐柏に抵れば、翠壁・赤城も一覧にして収むべし。」と。

●語注

○萬年寺　禅宗の寺で現存。唐代創建で栄西なども修行した古刹。「方外志」巻四に「萬年報恩寺、在縣西北六十里。唐太和七年、僧普岸建。（略）會昌中廃、大中六年號鎮國平田、梁龍徳中改福田、宋雍熙二年改壽昌、建中靖國火、崇寧三年重建、號天寧萬年、紹興九年改報恩廣孝、爲光孝、今復爲萬年（略）」とあり、同巻二（西門）に「古木千章、平田數頃。中有梵宮、殆絶人境。則有萬年寺之勝」とある。

○藏經閣　明の万暦十五年（一五八七年）に李太后が寄贈したという（徐名山注）。「方外志」巻四「萬年寺」に「萬暦十五年、慈仁明肅皇太后、頒賜藏經并紫方袍。僧明照弟子眞秀相繼主其事、建尊經閣并法堂禪室」とある。

○嘹嚦　鶴の美しく清らかな鳴き声の形容。

○桐柏宮　鳴柏観とも呼ばれる道観で現存。王子晋の治所であったとか、呉の孫権が葛玄のために建てたなどの伝承があるが、仮託。文献上確認できるのは、唐睿宗の景雲二年（七一一）に、司馬承禎のために重建されたこと。天台山道教の中心。「方外志」巻四に「在縣西北二十五里。唐景雲二年爲司馬承禎建」とあり、同巻二（西門第一支）に「九峯迢嶢、玄宮逍遙。僊凡路隔、度以三橋。則有桐柏之勝」とある。

○龍王堂　今の石梁鎮。天台山北部地域の交通の要衝。

○國清寺　天台山仏教の中心で現存。隋の煬帝が天台大師智顗のために創建した（竣工は

智顗没後）。天台県城から天台山へ入る入り口に位置し、山麓型・滞在型の寺院である。最澄や円珍などの日本僧も多く訪れた。「方外志」巻四に「在縣北一十里」とあり、同巻二（南門第一支）に「五峯環翠、宮殿俱高。雙澗奏響、和以松濤。則有國清寺之勝」とある。

○兩巖　天台県城の西にあった寒岩と明岩。

●口語訳

［四月四日］

《6》石梁飛瀑

天空も山々も黛のごとく青緑に輝いている。朝食をとる時間も惜しんで、すぐさま仙筏橋に沿って曇花亭に登る。石梁飛瀑は曇花亭の外になる。梁は広さが一尺あまり、長さが三丈あまりで、両岸のくぼみの所に架かっている。二筋の滝が亭の左から流れてきて、橋（石梁）に至って合流し、下へ流れ落ちている。雷や河が決壊するかのような轟音が鳴り響いている。滝の高さは百丈を下らない。

私は石梁の上を歩いてみて、深い淵を見下ろしたところ、ぞっとして鳥肌が立つほど慄然たる思いであった。石梁を渡り終えると向こう側に大きな石が聳えていて、向かいの岸に登ることはできない。そこで引き返した。

曇花亭を通り過ぎ、上方広寺に入る。寺の前を流れる渓流をさかのぼれば、さきほど隔壁となっていた大きな石の上に出る。そこに座って石梁を眺める。下方広寺の僧侶が食事を促すために声をかけてくれるまで、ずっと眺めていた。

《7》万年寺

昼食後、十五里進んで万年寺に至る。蔵経閣に登る。閣は二屋で、南北経の両方を蔵している。寺の前後には杉の古木が多くあり、三抱えほどの太さがある。鶴が巣を懸けており、美しく清らかな鳴き声を聞かせている。これもまた深山における雅やかな響きである。

この日私は、桐柏宮に向かい、さらに瓊台や双闕といった景勝を尋ねたいと思っていた。しかし、分かれ道が多く、迷いそうになったため、そのまま国清寺に向かうこととした。国清寺は万年寺から四十里ほどで、中程で龍王堂というところを通過する。嶺を一つ下るたびに、私はもう平地に着いたのかと思ったが、その下に更に幾重もの嶺があって、下りの勢いは中々やまない。そこでつくづく実感した、華頂峰の高さと言えば、天からさほど遠くないのだ、と。

《8》国清寺

日が暮れて国清寺に到着した。雲峰和尚と再会したが、あたかも久方ぶりに会うかのような気がした。これからの奇勝の探訪について相談する。雲峰和尚が言うには「天台山の名勝では、寒岩と明岩に及ぶものはない。遠いところにあるが、馬に乗っていけばいい。先ず寒岩・明岩を見て、後に歩いて桃源に至り、そこから桐柏宮に至るルートを取れば、碧壁や赤城も一望にすることができる」と。

◆国清寺に泊。

【四月五日】

■本文の部

初五日　有雨色、不顧。取寒・明兩巖道、由寺向西門覓騎。騎至、雨亦至。五十里、至歩頭、雨止、騎去。二里、入山。峯縈水映、木秀石奇。意甚樂之。一溪從東陽來、勢甚急、大若曹娥。四顧無筏、負奴背而渉。深過於膝。移渡一澗、幾一時。三里、至明巖。明巖爲寒山・拾得隱身地。兩山廻曲、『志』所謂八寸關也。入關、則四圍峭壁如城。最後、洞深數丈、廣容數百人。洞外、左有兩巖、皆在半壁。右有石笋突聳、上齊石壁、相去一線、青松紫蕊、蓊蔥於上。恰與左巖相對。可稱奇絶。出八寸關、復上一巖、亦左向。來時仰望如一隙、及登其上、明敞容數百人。巖中一井。曰仙人井、淺而不可竭。巖外一特石、高數丈、上岐立如兩人、僧指爲「寒山・拾得」云。入寺。飯後雲陰潰散、新月在天。人在廻巖頂上、對之清光溢壁。

■訳注の部

●訓訳

初五日　雨色有るも、顧みず。寒・明の兩巖の道を取り、寺より西門に向かい騎を覓む。騎至るも、雨も亦た至る。

五十里にして、歩頭に至れば、雨止み、騎も去る。

二里にして、山に入る。峯縈(めぐ)り水に映じ、木は秀いで石は奇なり。意甚だ之を楽しむ。一溪の東陽より来たるあり、勢ひ甚だ急なり、大なること曹娥の若し。四顧するに筏なし、奴の背に負はれて渉る。深さは膝を過ぎず。移りて一澗を渡るに、幾んど一時なり。

三里にして明巖に至る。明巖は寒山・拾得の身を隠す地なり。兩山廻曲し、《志》のいわゆる八寸關なり。關に入れば、則ち四囲の峭壁城の如し。最も後に、洞の深さ數丈なるあり、廣さ數百人を容る。洞外、左に兩巖有り、皆半壁に在り。右に石笋の突聳する有り。上は石壁に斉しく、相去ること一線のみ。青松紫蘂の上に蓊蔥たり、恰も左巖と相い對するがごとし。奇絶と稱すべし。

八寸關を出で、復た一巖を上るに、亦た左に向く。來りし時は仰ぎ望むに一隙の如きも、其の上に登るに及べば、數百人を敞容すること明らかなり。巖中に一井あり。仙人井と曰ふ。淺きも渇くべからず。巖外に一特石あり、高さ數丈、上に岐立すること兩人の如し。僧指して「寒山・拾得」となすという。寺に入る。飯の後ち雲陰潰散す。新月天に在り、人廻崖の頂上に在り、之に對すれば清光壁に溢る。

●語注

○寒巖　天台県城の西南四十㌔あまりにある。寒山が籠もったところと伝える。「方外志」巻二に「寒巖山、在縣西南七十里。」とある。

○明巖　寒巖に隣接した山。「方外志」巻二に「明巖山、在縣西七十里」とある。

○歩頭　寒巖・明巖の西北麓の小鎮（徐名山注）。

○東陽　県。金華府に属す。今の浙江省東陽県。この渓流は始豊渓。

○曹娥　曹娥江。

○寒山・拾得　唐代の詩僧。三百あまりの詩を残すが、その実在は不詳。
○志　「遊記」において「志」と記す場合は「大明一統志」を指すが、現存「大明一統志」には、「八寸関」の記述はない。
○蓊蓊　草木が生い茂る様。
○寺　寒巌寺。「方外志」巻四に「在縣西七十里。（略）舊名崇福、梁開平元年建、蓋寒山子棲隱處、周顯徳中改聖壽昭儀、（略）宋大中祥符二年改福善院、今爲寒巖寺」とある。

●口語訳

［四月五日］

《9》寒巌・明巌へ

雨模様であるが、気にせずに出かける。寒巌・明巌に至る道をたどる。国清寺の西門で乗る馬を求める。馬がやってきたが、同時に雨も降り出す。

五十里進み歩頭に至ると雨がやむ。馬も返す。

二里進み、山に入る。周囲をめぐる峯々が渓流に映えており、樹木が生い茂り奇岩が重なっている。とても心地よい。東陽県から一筋の渓流が流れてきているが、水勢がはなはだ急で、川幅（流量）は曹娥江に匹敵するほどである。辺りを見渡したが渡してくれる筏もなく、従僕に背負われて渡る。深さは膝ほどである。渡りきるのにほとんど一時を要する。

《10》明巌

三里進むと、明巌に至る。明巌は寒山と拾得が隠棲したところで、二つの山が曲がっている。《大明一統志》にいう「八寸関」である。関に入ると、四周に崖が城壁のように切り立っている。最も奥に、数百人が入れるほどの深さ数十丈もの洞窟がある。洞窟の外の左には、二つの巌があり、どちらも石の壁の半ばにめりこんでいる。洞窟の右には石筍が突き立つように聳えている。その先端は石壁と同じ高さにまでなり、一筋の線ほどしか離れていない。石筍の上には青い松や紫の花が盛んに茂っており、左側の両巌と相対しているかのごとくである。誠に奇勝であるといえよう。

八寸関を出て、再び岩山を上ると、左にまがる。初め来た時に、下から仰ぎ見たときは、わずかな隙間程度しかないように見えたが、実際に登ってみると、数百人もの人数を収容できる広さがあることに気づく。巌の中に井戸がひとつある。仙人井という。浅いがつきることはない。明巌の外にまた大きな岩塊がある。高さは数十丈、高く聳える様が（上の部分が二つに割れていることから）二人の人間が立っているかのようである。僧侶たちは、指さして「寒山と拾得だ」という。

寺（寒巌寺）に入る。夕食後雲が晴れ、新月が天に昇る。めぐらせた崖の頂上にあって、月に向かえば、美しい光が岩壁にあふれている。

◆寒巌寺に泊。

【四月六日】

■本文の部

初六日　凌晨出寺。六七里、至寒巖。石壁直上如劈。仰視空中、洞穴甚多。巖半有一洞、闊八十歩、深百餘歩、平展明朗。循巖右行、從石隘仰登。巖坳有兩石對聳、下分上連、爲鵲橋。亦可與方廣石梁爭奇、但少飛瀑直下耳。還飯僧舍、覓筏渡一溪。循溪行山下、一帶峭壁巉崖、草木盤垂其上、内多海棠紫荊、映蔭溪色、香風來處、玉蘭芳草、處處不絶。已至一山嘴、石壁直竪澗底。澗深流駛、旁無餘地。壁上鑿孔以行、孔中僅容半趾、逼*1身而過、神魄爲動。自寒巖十五里、至歩頭、從小路向桃源。桃源在護國寺旁、寺已廢、土人茫無知者。隨雲峯莽行曲路中。日已墮、竟無宿處。乃復問至坪頭潭。潭去歩頭僅二十里、今從小路、返迂迴三十餘里。宿。信桃源誤人也。

●校勘

＊1逼　定本は偪、朱本等により改めた。

■訳注の部

●訓訳

初六日　晨を凌ぎて寺を出ず。

六七里にして寒巖に至る。石壁直上なること劈の如し。仰ぎで空中を視るに、洞穴甚だ多し。巖の半ばに一洞有り、闊さ八十歩、深さ百餘歩、平展明朗なり。巖に循ひて右に行き、石隘より仰ぎ登る。巖坳に兩石の對聳する有り、下は分かれ上は連なる、鵲橋たり。亦た方廣・石梁と奇を爭ふべし。但し飛瀑の直下するを少とするのみ。

還りて僧舍に飯す。

筏を覓めて一溪を渡る。溪に循ひて山下を行く。一帶峭壁巉崖にして、草木其の上に盤垂す。内に海棠・紫荊多し。蔭は溪に色を映じ、香風の來るところ、玉蘭芳草、處處絶えず。

已に一山嘴に至るに、石壁澗底より直竪す。澗は深く流れは駛(はや)く、旁に餘地なし。壁上に孔を鑿ちて以て行く、孔中僅かに半趾を容るるのみ。身を逼して過ぐ。神魄ために動く。

寒巖より十五里にして、歩頭に至る。小路より桃源に向かふ。桃源は護國寺の旁に在り、寺已に廢されて、土人も茫として知るものなし。雲峯に隨ひて曲路の中を莽行す。日已に墮ち、畢に宿處なし、乃ち復た問ひて坪頭潭に至る。潭は歩頭を去ること僅か二十里、今小路によるにより、反って迂路すること三十餘里なり。宿す。信に桃源の人を誤るなり。

●語注

○海棠　バラ科の落葉低木植物。春に薄紅色の花を咲かせる。

○桃源　天台山西部の谷。唐代くらいまでは注目されていなかったが、のちに劉晨阮肇の遇仙説話と結びつき、桃源の名を冠せられた。

○護國寺　五代後周創建。「方外志」巻四に「在縣西北三十里十四都。舊名般若、周顯德四年（九五七）建。蓋僧德韶第九道場。宋大中祥符元年（一〇〇八）改今額」とある。徐霞客によれば、当時施設は湮滅していたようである。現在でも地名として残る。

○坪頭潭　徐名山注・朱注は、いまの平鎮だという。

●口語訳

［四月六日］

《11》寒巌

早朝に寺を出発する。

六七里進むと寒巌に至る。石が壁のように垂直に切り立っている様は、あたかも刀で切り取ったかのようである。振り仰いで高い所を見ると、洞窟がとても多い。巌の半ばに一つ洞窟があり、広さは三十歩、深さは百歩余りもあり、洞内も平らで広々として明るい。巌に沿って右に進み、岩の狭い小径を上に登る。巌の低くなった窪地に二つの石が向かい合って聳えている。下の部分は分かれているのに、上の方でつながっている。これがあの「鵲橋」である。この滝は、あの方広寺附近の石梁飛瀑と奇を争う名勝であるが、ただ、瀑布がまっすぐ落ちている点が、やや魅力を欠く。

引き返し、僧侶の宿舎で昼食をとる。

《12》桃源へ

のち筏を求めて渓流を下ることとし、谷川に沿って山の下を進む。この一帯は、切り立った壁のような険しい崖が続いており、草木がその上にはびこって垂れている。海棠樹や紫荊藤が多く、その翠が渓流に美しく映り、香しい風が吹き寄せるところでは、玉蘭花や香草がどこにでも広がって、絶えることがない。

一つの山の突端に至ると、石の壁が渓流の底から直立している。川は深く流れは速く、しかも川岸に通れる余地はほとんどない。岩壁の上に穴をあけ、そこを行くのだが、穴は僅かに足の半分しかない。岩壁に張り付くようにして通るのだが、魂魄を多いに恐ろしがらせるものである。

寒巌より十五里進むと、歩頭に至る。（往路とは異なり）小道を通って桃源へ向かう。桃源は護国寺のそばにある（はずである。しかし）。護国寺の廟宇は既に廃棄されており、土地の人でも知る人はいない。雲峰和尚に従って草ぼうぼうの曲がりくねった道を推し進むが、太陽は沈み、宿とするところもない。かくしてまたも道を尋ね、ようやく坪頭潭というところに至る。潭は歩頭より僅かに二十里なのだが、今回は小道を通ったがため、迂回することになって三十里あまりの道のりだった。ここで宿す。桃源は訪れようとする人を惑わすというのは、本当のことだった。

◆坪頭鎮に泊。

［四月七日から八日］

■本文の部

初七日　自坪頭潭、行曲路中三十餘里、渡溪入山。又四五里、山口漸夾。有館、曰桃花塢。循深潭而行。潭水澄碧、飛泉自上來注。爲鳴玉澗。澗隨山轉、人隨澗行。兩旁山皆石骨、攢巒夾翠。涉目成賞、大抵勝在寒・明兩巖間。澗窮路絶。一瀑從山坳瀉下、勢甚縱横。出飯館中、循塢東南行、越兩嶺。尋所謂「瓊臺」「雙闕」、竟無知者。去數里、訪知在山

頂。與雲峯循路攀援、始達其巔。下視峭削環轉、一如桃源。而翠壁萬丈過之。峯頭中斷、即爲雙闕。雙闕所夾而環者、即爲瓊臺。臺三面絶壁、後轉即連雙闕。余在對闕、日暮不及登、然勝已一日盡矣。遂下山、從赤城後還國清、凡三十里。

初八日　離國清、從山後五里、登赤城。赤城山頂圓壁特起、望之如城、而石色微赤。巖穴爲僧舍凌雜、盡掩天趣。所謂玉京洞・金錢池・洗腸井、俱無甚奇。

■訳注の部

●訓訳

初七日　坪頭潭より曲路を行くこと三十餘里、溪を渡りて山に入る。

又　四五里、山口漸く夾し。館有り、桃花塢と曰ふ。深潭に循ひて行く。潭の水は澄碧にして、飛泉上より夾注す、鳴玉澗たり。澗は山に隨ひて轉じ、人は澗に隨ひて行く。兩旁の山は皆石骨にして、攢巒は翠を夾む。渉目賞を成し、大抵　勝は寒・明兩巖の間に在り。澗窮まり路絶す。一瀑の山坳より瀉下し、勢い甚だ縱横なり。

飯館の中より出で、塢に循ひて東南に行き、兩嶺を越ゆ。所謂「瓊臺」「雙闕」を尋ねんとするに、竟に知る者なし。

去ること數里、訪ねて山頂にあるを知る。雲峯と路に循ひて攀援し、始めて其の嶺に達す。下を視れば峭削環轉し、一に桃源の如し。しかして翠壁の萬丈たるは之を過ぐ。峯頭中ごろに斷す、即ち雙闕たり、雙闕の夾みて環るところは、即ち瓊臺たり。臺は三面絶壁す、後ろに轉ずれば即ち雙闕に連なる。余闕に對するに在り、日暮れ登るに及ばず、しかれども勝は已に一日にして盡く。遂に山を下る。赤城の後より國清に環る、凡そ三十里なり。

初八日　國清を離れ、山の後に從ふこと五里にして、赤城に登る。赤城の山頂は圓壁特起し、之を望むこと城の如くにして、石色微かに赤し。巖穴は僧舍の凌雜するところとなり、盡く天趣を掩ふ。所謂玉京洞・金錢池・洗腸井、俱に甚だしく奇なるはなし。

●語注

○攢巒　重なる山並み。柳宗元「徵咎賦」に「攢巒奔以紆委兮，束洶湧之崩湍」とある。

○飯館　朱注や朱復融注では、これを桃花塢ととる。山中に館がたくさんあるとも思えないが、本文を読む限り、桃花塢からあちこち歩き回っているようにも見える。

○雙闕　天台山中の名勝のひとつ。ふたつの巨大な岩山が闕のように並んで聳えている。「方外志」巻二に「自桐柏西北二里至元應眞人祠、取道僊人蹟、經龍潭側、凡五里、至瓊臺、轉南三里、至雙闕」とあり、同巻二（西門第一支）に「瓊臺薄漢、雙闕凌霄。其誰神司、僊者王喬。則有瓊臺雙闕之勝」とある。

○瓊臺　これも名勝のひとつで自然物。巨大な台のような岩山。雙闕に隣接する。

○赤城　赤城山。「方外志」巻二（山）に「在縣北六里、一名燒山、又曰消山、石皆霞色、望之如雉堞、因以爲名。（略）」とあり、同巻二（南門第一支）に「赤城建標、珠林蔟蔟。誰其談諸、霞紅雲緑。則有赤城山之勝」とある。

○玉京洞　赤城山上にある道觀。「方外志」巻三（洞）に「在赤城右脇、蓋十洞天之第六、茅司命眞君所治（略）」とある。

○金錢池　「方外志」巻三（池）に「在赤城山、相傳曇蘭憩此、誦經有神獻金錢、棄池中、

故名」とある。
○洗腸井　「方外志」巻三（井）に「在赤城山、曇猷洗腸處、今井邊猶生青非、即其驗也」とある。

●口語訳

［四月七日］

《13》瓊台へ

　坪頭潭を出発し、曲がりくねった山路を行くこと三十里余り、渓流を渡って山に入る。
　さらにまた四五里進むと、山の口が次第に狭くなっていく。「桃花塢」という館がある。深い淵に沿って進む。淵の水は澄み切っていて青々としており、滝の水が上から注ぎ込んでいる。鳴玉澗という場所である。澗の水は山沿いに流れて行き、人はその澗に沿って進む。澗の両岸の山は全てむき出しの岩石で、重なる山並みは随所に緑の木々を擁している。目に見えるものは全て観賞に堪えるものであり、そのすばらしさは、おおよそ寒巌・明巌に匹敵するほどである。澗が行き詰まると道もなくなる。一条の滝が山のくぼみから流れ落ちており、水勢は縦横無尽である。
　昼食後、館を出発し、山の窪地に沿って東南へ進み、二座の山嶺を越える。有名な「瓊臺」「雙闕」を尋ねようとするが、どこにあるのか知る人がいない。

《14》瓊台

　さらに数里進み（人に尋ねたところ）、その山頂にあることが分かる。雲峯とともに山道をよじ登り、ようやくその山頂に到達する。下を俯瞰すれば切り立った崖が四面を囲んでおり、まったく桃源郷のような風景である。しかし緑なす岩壁が万丈も続く様は桃源郷を上回っている。山峰の頂上部分が真ん中から裂けて分かれているところがある。これが双闕である。双闕に向かい合ってぐるっと囲まれているものがある、これが瓊台である。台は三面が絶壁で、その一方はそのまま双闕につながっている。私は双闕に相対する位置におり、日が暮れてきたのでそこに登ることはできない。しかしこの辺りの景勝については既に一日満喫した。そこで山を下り、赤城山の後を通って国清寺にもどる。だいたい三十里の道のりである。
◆国清寺に泊。

［四月八日］

《15》赤城山

　国清寺を離れ、山の裏側の道を五里進んで赤城山に登る。赤城山の山頂は円形の岩盤が空に聳えており、城郭のように見え、岩石の色は微かに赤い。岩穴があるが、僧侶どもがでたらめに居を構えており、天然の景勝を台無しにしている。有名な玉京洞・金銭池・洗腸井も、これといって見るべきものではない。

（終）

（訳注：薄井俊二、二〇一一年一二月一三日）
（加筆修正：薄井俊二、二〇二三年五月九日）

＊口語訳と簡単な注を「「徐霞客遊記」訳注稿　名山遊記（一）―「遊天台山日記」」（『埼玉大学国語教育論叢』第十四号、二〇一一）に掲載。